

2015年—図書館をめぐるメディアでの扱いとテレビドラマ『偽装の夫婦』

日本語日本文化学科・教授

佐藤 毅彦

1. はじめに

2015年の年末に刊行された、出版業界の専門誌『出版ニュース』『新文化』では、「2015年の10大ニュース」に、いずれも図書館を扱ったものが入っている。『出版ニュース』『2015年出版界・読書界10大ニュース』では、「3 指定管理の『ツタヤ図書館』をめぐる」1)が、『新文化』『2015年 出版界10大ニュース』では、「5 海老名市立図書館、TRCとCCCが共同運営 選書などめぐり一時亀裂」2)が、掲載された。出版界でも、図書館をめぐる状況に注目が集まった一年だったことを示しているといえよう。

とくに、CCC（カルチャ・コンビニエンス・クラブ）が運営に関与してきた武雄市図書館については、2015年2月、月刊誌『選択』に、「武雄市『TSUTAYA』委託が最悪例 すすんでいく『公共図書館』」3)が掲載され、2015年夏には、開館時点での選書に関して、新聞各紙での報道にくわえ、『週刊朝日』が連続して取り上げ、4)また、ふだんはあまり図書館関係の記事を掲載することのない『女性セブン』5)でも報じられ、テレビ朝日系列の『モーニングバード』（2015年9月14日）では、現地取材の様子放送された。

2015年の年末には、この問題に対するまとまった批判として、田井郁久夫「虚像の民営化『ツタヤ図書館』 公立図書館の役割とは」が、岩波書店刊行の月刊誌『世界』に発表された。6)小田光雄は、「出版状況クロニクル」において、この記事を紹介し、「ここまで武雄図書館の実情に迫った分析はない」「図書館のみならず、出版社や取次も必読の論文である。大学図書館科教師を見直す思いだ」と述べている。7)

2015年秋以降は、『週刊ダイヤモンド』8)、『週刊東洋経済』9)、『NIKKEI BUSINESS』10)、などの経済関係誌で、内容や観点は異なるが、図書館・読書に関連した特集記事が掲載された。

また、お笑い芸人が芥川賞を受賞したことで話題となった『火花』に、図書館で多くの予約がついていること、そのこととの関連で、図書館における文芸新刊書の貸出猶予要請がなされていることが、報道された。11)さらに、神戸市少年殺傷事件加害者による著作『絶歌』の扱いをめぐる、行政がわが、図書館での提供に言及したこと、12)作家の村上春樹氏の高校時代の利用記録である図書館のカードが『神戸新聞』に掲載されたこと、13)なども、図書館に関係する事象で、2015年に、多くのメディアにとりあげられた話題であった。

一方、フィクションの分野では、たとえば、小説で、過去に図書館をストーリーに登場させたことのある作家の作品で、図書館を扱った例がみられた。門井慶喜『東京帝大 叡古（えいこ）教授』には、東京帝大時代の図書館で、死体を発見するシーンが冒頭の章（第一話「図書館の死体」）に描かれている。14)また、法月綸太郎『怪盗グリフィン対ラトウィッジ機関』では、ニューヨーク公共図書館が舞台となっており、その図書館に勤務して

いるという設定の人物が登場する。15)

注)

1) 「2015年出版界・読書界10大ニュース」『出版ニュース』2015.12月下旬号、pp.4-9

CCC（カルチュア・コンビニエンス・クラブ）が市立図書館の運営に関与している、武雄市・海老名市での選書問題や、小牧市・周南市での図書館についての住民投票を扱っている。「事の本質は自治体が図書館に指定管理者を導入するのか、しないか、それによって、図書館が利用者にどういう利便を与えるかにある。秋口からマスコミ論調は図書館のあり方論に移ってきているようである」としている。

なお、『出版ニュース』には、2015年12月から、「図書館界ウォッチング」が掲載され、海老名市図書館でのTRC（図書館流通センター）とCCCの共同事業をめぐる経緯を紹介し、小牧市、周南市での住民投票にも触れている。また、この問題をめぐるメディアでの関係者の発言を要約して紹介している部分もある。他にも、「図書館のあり方、現状や課題を考えるきっかけとなる話題」として、『神戸新聞』が「村上春樹氏の本の貸出記録を公表した記事が論議」をよんだことなどが紹介されている。

「図書館ウォッチング1」『出版ニュース』2015.12月上旬号、pp.10-12

なお、このページは「毎月上旬号」に掲載、と予告されている。

2) 「2015年出版界10大ニュース」『新文化』2015.12.24、p.1

海老名市図書館で、TRCとCCCが共同事業者となり、選書や分類などで亀裂が生じたが、「市民サービスの観点から」「事業体の継続」となったことが紹介されている。

3) 「武雄市『TSUTAYA』委託が最悪例 すさんでいく『公共図書館』」『選択』2015.2、pp.104-105

4) 「衝撃事実発覚 あの樋渡前武雄市長、ツタヤ関連企業に天下り！ 真夏のワイド」『週刊朝日』2015.8.21、p.30

「武雄市 TSUTAYA 図書館、関連会社から“疑惑”の選書」『週刊朝日』2015.9.11、pp.168-169

「『ずさんな選書』にCCCが反省 ワイド特集・土俵際なひとたち」『週刊朝日』2015.10.2、pp.26-27

「『リアル図書館戦争』各地で戦線拡大 ワイド特集・戦いは終わらない」『週刊朝日』2015.10.9、pp.30-31

「“海老名ツタヤ図書館”の内幕 新たな疑惑に市民が激怒 ワイド特集」『週刊朝日』2015.10.9、p.31

「海老名 TSUTAYA 図書館、ポリシーなき選書と驚愕のジャンル分け ワイド特集・七転び八起き」『週刊朝日』2015.10.23、pp.26-28

「『週刊ツタヤ図書館』山口・周南市でも反対グループ発足 ワイド特集・怒りと涙と」『週刊朝日』2015.9.11、pp.138

「宮城・多賀城市で来春オープン ツタヤ図書館の不透明な契約」『週刊朝日』2015.11.27、pp.126-127

- 5)「佐賀・武雄市民は怒ってます『リアル図書館戦争』『女性セブン』2015.9.10、pp.45-47
6)田井郁久夫「虚像の民営化『ツタヤ図書館』 公立図書館の役割とは」『世界』2015.12、pp.196-205

内容は、これまで、季刊図書館批評誌『談論風発』に発表されたものに、選書問題など、2015年になって表面化した事態への批判をくわえたものである。

- 7)「出版状況クロニクル(2015年11月1日～11月30日)出版・読書メモランダム」

(<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20151201/1448895608>)

- 8)「特集『読書』を極める!戦う書店、使い倒せる図書館の歩き方」『週刊ダイヤモンド』2015.10.17、pp.28-29

「成毛真と本を買いに」『週刊ダイヤモンド』2015.10.17、pp.30-33

「知性を磨く読書術」『週刊ダイヤモンド』2015.10.17、pp.34-51

「『新しい図書館』戦争」『週刊ダイヤモンド』2015.10.17、pp.52-63

「出版不況と闘う書店」『週刊ダイヤモンド』2015.10.17、pp.64-77

- 9)「『俺たちはお化けなんだ』TUTAYA破壊と創造」『週刊東洋経済』2015.10.31、pp.34-36

「誤解と憶測に満ちた見えざる『企画会社』の素顔」『週刊東洋経済』2015.10.31、pp.37-43

- 「市民価値向上か 知の破壊か TUTAYA 図書館の賛否」『週刊東洋経済』2015.10.31、pp.44-47

「独占直撃 カルチュア・コンビニエンス・クラブ社長 増田宗明」『週刊東洋経済』2015.10.31、pp.48-53

- 10)「敗軍の将、兵を語る 愛知県小牧市長 山下史守朗 『ツタヤ図書館』否決もあきらめず」『NIKKEI BUSINESS』2015.11.09、pp.138-139

- 11)又吉直樹『火花』文藝春秋、2015.3

たとえば2015年11月3日の「文化の日」に公開された『産経ニュース』では、全国図書館大会で、「新潮社の佐藤隆信社長」が文芸書新刊の図書館での貸出を1年間猶予することを要請したことにふれる一方で、「武蔵野市立図書館」では『火花』を「市内の3つの市立図書館で計30冊所有、それでも2年待ち」であることが紹介されている。

「『無料貸本屋』論争 販売部数を上回った貸出数 図書館は今(中)」『産経ニュース』2015.11.3

(<http://www.sankei.com/life/news/151103/lif1511030012-n1.html>)

ちなみに、この記事の前後の日付では、

「ツタヤ流 混乱招く『出会い系』型 図書館は今(上)」『産経ニュース』2015.11.2

(<http://www.sankei.com/life/news/151102/lif1511020015-n1.html>)

「電子書籍サービス 知る権利に応える 図書館は今(下)」『産経ニュース』2015.11.4

(<http://www.sankei.com/life/news/151104/lif1511040006-n1.html>)

が、公開されている。

この件に対する図書館界の反応として、たとえば、次の記事が『朝日新聞』に掲載されている。

「貸し出し猶予、『主張に矛盾』 図書館側が反発 本売れぬ要因は他に」『朝日新聞』
2016.2.17、p.30

12)元少年 A『絶歌』太田出版、2015.6

「日本図書館協会 図書館の自由委員会」刊行のニューズレター『図書館の自由』では、
以下の記事で、この間の動向をまとめている。

「図書館の自由に関する事例について (2) 神戸連続児童殺傷加害者手記『絶歌』をめぐ
って」『図書館の自由』no.89、2015.8、pp.4-14

「図書館の自由に関する事例 (2) 神戸連続児童殺傷加害者手記『絶歌』をめぐって 関
連資料その 1」『図書館の自由』no.90、2015.11、pp.3-32

「図書館の自由に関する事例 (2) 神戸連続児童殺傷加害者手記『絶歌』をめぐって 関
連資料その 2」『図書館の自由』no.91、2016.2、pp.2-18

「図書館の自由に関する事例 (3) 学会発表から 大谷康晴ほか「公共図書館における『絶
歌』の収集と提供」『図書館の自由』no.91、2016.2、p.18

「図書館の自由に関する事例 (3) 学会発表から 大谷康晴ほか「図書館の資料選択の論
理『絶歌』の所蔵状況を通じて」『図書館の自由』no.91、2016.2、p.19

13)「村上春樹さん 早熟な読書家 仏作家ケッセルの長編 高1で愛読 母校神戸高に貸
し出し記録 蔵書整理の元教諭が発見」『神戸新聞』2015.10.5、p.9

この記事には、「『村上春樹』と記名された帯出者カード」が掲載されている。

「日本図書館協会 図書館の自由委員会」刊行のニューズレター『図書館の自由』では、
以下の記事で、この間の動向をまとめている。

「図書館の自由に関する事例 (1) 神戸高校旧蔵書貸出記録流出について」『図書館の自
由』no.90、2015.11、pp.1-3

「図書館の自由に関する事例 (1) 神戸高校旧蔵書貸出記録流出について 調査報告」『図
書館の自由』no.91、2016.2、pp.1-2

14) 門井慶喜『東京帝大 叡古(えーこ)教授』小学館、2015.3

書名は、邦訳タイトル『薔薇の名前』の著者として知られる、ウンベルト・エーコ、を
連想させる。また、この小説の冒頭の章のタイトル「図書館の死体」は、翻訳ミステリ「図
書館長シリーズ」の一冊の邦訳タイトル『図書館の死体』をふまえたものと思われる。

ジェフ・アボット著、佐藤耕士翻訳『図書館の死体』早川書房(ハヤカワ・ミステリ文
庫)、2005.3

門井慶喜は、市立図書館でのレファレンスサービスと財政状況の点から図書館の廃止に
ついて議論する市議会の文教常任委員会で、図書館員が「図書館廃止に反対」の意見を陳
述する『おさがしの本は』(雑誌連載時のタイトルは「レファレンス・カウンターの難問」)
を刊行している。

門井慶喜『おさがしの本は』光文社(文庫)2011.11←光文社、2009.7

15) 法月綸太郎『怪盗グリフィン対ラトウィッジ機関』講談社、2015.7

法月綸太郎の、自らのペンネームと同じ名前の名探偵をメインキャラクターとする『法月

綸太郎の冒険』『法月綸太郎の新冒険』には、図書館に勤務する「沢田穂波」が登場する「図書館シリーズ」作品群が収録されている。

法月綸太郎『法月綸太郎の冒険』講談社（文庫）、1995.11←講談社、1992.11

法月綸太郎『法月綸太郎の新冒険』講談社（文庫）、2002.7←講談社、1999.5

2. 2015年の映像メディアにおける図書館とテレビドラマ『偽装の夫婦』の設定

映像の分野では、映画の撮影に図書館が使われたケースとして、たとえば、2013年に公開されて話題となった『図書館戦争』の続編、映画『図書館戦争 LAST MISSION』が2015年10月10日に公開された。十日町情報館（新潟県）、北九州市立中央図書館（福岡県）、宮城県図書館、などで撮影されたこの映画については、劇場での舞台挨拶以外に、大阪府立中之島図書館、や、撮影が行われた、仙台市、十日町などでイベントが実施されたことがHPで紹介されている。1)また、映画の公開に先立ち、TBS系列で、映画『図書館戦争 LIBRARY WARS』テレビ特別編集版（2015年10月4日）、テレビ特別企画『図書館戦争 ブック・オブ・メモリーズ』（2015年10月5日）が、連夜にわたって放送された。他に、桐谷美玲主演の、映画『ヒロイン失格』も成蹊大図書館で撮影されたことが、大学HPで公表されている。2)

テレビでは、日本テレビ系列で放送されている『世界一受けたい授業』（2015年5月30日放送）に、秋田県の国際教養大学（AIU）鈴木典比古学長が登場し、大学の特色を紹介する中で、大学図書館についてもふれていた。3)24時間開館し、地産の秋田杉を使用していることで、建築的にも注目されるこの図書館では、エッセイスト・阿川佐和子が出演した、参天製薬「新サンテドウ」のCMが撮影された。4)また、「AKBの公式ライバル」と称されるアイドルグループ「乃木坂46」の生駒里奈（秋田県出身）が『明日を発見！秋田県。』のポスターを撮影。「世界が注目する国際教養大学の図書館で読書をする姿」が、「山手線内のトレインチャンネル」で「撮影時の様子」の動画として放映された。5)

テレビドラマでは、フジテレビ系列で、2015年8月～9月に、8回にわたって、放映された『ブスと野獣』（土曜23:40～ 第1回・第6回は、日曜0:10～）で、最初の回に、書架の同じ本に手を伸ばそうとする男女の姿が描かれている。6)

また、テレビ東京系列で、笹本稜平『駐在刑事』シリーズを原作とした、ドラマが制作され、図書館に勤める女性が、メインキャラクターである男性警察官のパートナー的な役柄で、図書館でコンピュータを操作して、事件を捜査するプロセスで、ある人物についてメディアでの扱われている情報を調べて、警察官に提供している場面もあった。7)

こうした中、テレビドラマ『偽装の夫婦』は、2015年10月7日～12月9日、毎週水曜日、22:00～ 10回にわたって、日本テレビ系列で放送された。このドラマでは、かつて宝塚歌劇団に所属し、短期間で、男役トップ（月組）についたのち、退団して、女優に転身後も、多くの人気ドラマに出演してきた、天海祐希が、図書館に勤めるキャラクターを演じることで注目された。脚本は遊川和彦で、天海祐希主演のドラマは、『女王の教室』（2005）、『演歌の女王』（2007）を手がけている。視聴率は、全ての回で10%以上を記録した。8)

ドラマの画面に登場する図書館は、建物（福生市立中央図書館で撮影）の入り口に出ている看板には、「文の泉図書館」と表示されている。9)どのような性格の財源で維持されているかは、明確には示されないが、後半の放送では、図書館長が「都庁からここに出向を命じられた時から」と発言している（第7回放送）。また、利用者のひとりが職員に向かって「あたしたちの税金なんだから」（第6回放送）、「税金どろぼう」（第7回放送）、と発言しているシーンがあり、公共図書館という設定と思われる。ただ、館種の違いなど、図書館業界関係者以外は、関心がなく、東京都と特別区（23区）・多摩地区・島嶼部などの東京都内の自治体の違いも、あまり意識はされずに、いちばん身近な存在で、だれでも利用可能な施設が、税金によって設置・運用されているということで、公共図書館という設定になっているのではないか。

実際には、近年は、図書館長も含めて、職員の雇用状況は多様で、それによって、待遇にも大きな格差があり、非正規公務員が多く存在しているのが公共図書館であることが、問題とされているが、このドラマでは、そうした状況にはあまり立ち入っていない。

メインキャラクターである「嘉門ヒロ」（天海祐希）は、「45歳」「図書館司書」という設定が、HPで紹介されている。10)この人物の経済的状況について、たとえば、通帳が映されるシーン（第1回放送）では、残高は100万円余りとなっている。また、1か月分の給与として振り込まれているとみられる金額は、22万円程度であり、年齢からして、正規の公務員として勤務しているとは、考えにくい。11)勤続年数などの関係もあり、いちがいに決めつけるわけにはいかないが、収入は、さほど多くなく、貯金も少ない、という設定である。このため、所持する本の重さにより、住んでいる部屋の床が抜けてしまい、家主から、300万円余りの金額を請求されて、「偽装結婚」を承諾せざるを得なくなるというストーリーである。

注)

1)映画『図書館戦争 LAST MISSION』公式サイト

(<http://www.toshokan-sensou-movie.com/tlm/report/index.html>)

2)「9月19日公開の映画『ヒロイン失格』の撮影が行われました」『NEWS&TOPICS』成蹊学園

(<http://new.seikei.ac.jp/gakuen/topics/919.html>)

3)鈴木典比古先生「就職率100%の大学学長が教える！世界で通用する人材の育て方」

(<http://www.ntv.co.jp/sekaju/onair/150530/01.html>)

4)「目薬のテレビCMに本学の図書館が使われています」公立大学法人国際教養大学

(http://web.aiu.ac.jp/aiutopics/2015/06/16_15745.html)

5)「発見！秋田県のいいところ 生駒里奈（乃木坂46）スペシャルインタビュー」『明日を発見！秋田県。』

(<http://akita-hakken.jp/contents05.html>)

国際教養大学図書館内で、秋田杉の机・いすに座って、有川浩『図書館戦争』（文庫）、を手にする、生駒里奈、の写真が掲載されている。

「生駒里奈と一緒に秋田県の魅力を山手線内で発見」『ニュースウォーカー』

(<http://news.walkerplus.com/article/64086/>)

「トレインチャンネル」は「首都圏の主要 8 路線で映像放映が展開可能」とある。

(<http://www.jeki.co.jp/transit/signage/trainchannel/>)

生駒里奈が選抜メンバーとなっている「乃木坂 46」の 7th シングル『バレッタ』には「図書室の窓際で女子たちが声ひそめ会議中」というフレーズがある。

同じく、選抜メンバーの生田絵梨花は、テレビドラマ『ビブリア古書堂の事件手帖』に出演し、図書委員の役を演じたが、このドラマについて、以下で取り扱った。

佐藤毅彦「2013 年—図書館の現況とフィクションの中の図書館—図書館はどうみられてきたか・14—」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.50、2014.3、pp.9-22

また、2016 年にグループからの卒業を発表した、選抜メンバーの深川麻衣は、「図書館司書」の設定で撮影されたグラビアに登場している。

「深川麻衣×図書館司書 乃木坂 46 if」『月刊エンタメ』2015.8、no.170、pp.20-25

「もしもあの乃木坂のメンバーがアイドルじゃない普通の女の子だったら……。そんな『if』の世界」(p.20)、「今回は『司書さんの休日』がテーマ」(p.23)という設定。

掲載された中には、書棚の前で撮影されている写真もあるが、本人のブログ(<http://blog.nogizaka46.com/mai.fukagawa/>)の撮影当日の記述(2015 年 7 月 1 日 夢が 1 つ叶った日)で「撮影をした BUNDAN カフェ」とあるように、図書館ではなく、ブックカフェ「BUNDAN COFFEE&BEER」(<http://bundan.net/>)で撮影されている。

6)「ブスと野獣」(新番組)『日刊スポーツ』2015.8.1、p.15、には、「2 人が偶然、図書室で同時に同じ本に手を掛ける」と紹介されている。

7)「水曜ミステリー9『駐在刑事 2』」2015 年 4 月 15 日 21:00~22:48

(http://www.tv-tokyo.co.jp/program/detail/17500_201504152100.html)

「水曜ミステリー9『奥多摩駐在刑事 3』」2015 年 9 月 16 日 21:00~22:48

(http://www.tv-tokyo.co.jp/program/detail/17500_201509162100.html)

笹木優子が演じる「内田遼子」が図書館司書という設定。

原作としてあげられているのは、以下の笹本稜平による小説。

笹本稜平『駐在刑事』講談社(文庫)、2009.9←講談社、2006.7

上記の文庫本に収録されている「風光る」の末尾で、遼子は、「『町立図書館で司書の仕事に空きがあって、たまたま資格を持っていたから、応募してみたら採用されたの』」(p.203)と話している。

笹本稜平『尾根を渡る風 駐在刑事』講談社、2013.11

8)『偽装の夫婦』最終回視聴率は 12.8% 全話 2 桁キープ』『スポニチ Sponichi Annex』2015.12.10

(<http://www.sponichi.co.jp/entertainmant/news/2015/12/10/kiji/K20151210011662150.html>)

9)福生市では「FUSSA LOCATION SERVICE」(<http://fussafilm.com/>)で、市内での撮影

情報を公開している。『偽装の夫婦』については、以下の2件の紹介がある。

「日本テレビ水曜ドラマ『偽装の夫婦』の撮影が福生市立中央図書館で行われました。」

「2015年10月1日」

「福生市立中央図書館にて日本テレビ水曜ドラマ『偽装の夫婦』最終話の撮影が行われました。」「2015年12月7日」

10)「イントロダクション」『偽装の夫婦』日本テレビ

(<http://www.ntv.co.jp/fake/introduction/index.html>)

11)通帳が映るシーンで、残高と思われる数値は「1,210,748」、1ヶ月分の収入と推定される、直近の振込額は「220,340」である。一方、部屋の床が抜けたことについての請求書の額は「3,062,880」(第1回放送)。

3. 『偽装の夫婦』と図書館

このドラマのヒロイン「嘉門ヒロ(天海祐希)」は、「本だけをこよなく愛する」「人間嫌い」「穏やかな笑みを浮かべながら、心の中で周囲の人に悪態をつく」キャラクターで、「古いアパートの一室で大量の本に囲まれて孤独な生活」を送りながら、図書館に勤務するという設定だった。1)心の中で思っても、口に出しての発言はしていないモノローグの部分は、字幕で表示された。

25年ぶりに再会した、かつての恋人「陽村超治(沢村一樹)」に、「図書館で司書やってたんだな。昔から好きだったもんなあ、本読むの」といわれており、「本好き」＝「図書館勤務」という図式である。さらに、同じ人物から、「大学のときのキラキラ感というか、オーラがまったくきえちゃってる」「現実から目そむけて本の世界に逃げ込んで」「いつまでも自分を牢獄みたいな場所にとじこめて」(第1回放送)といわれているように、現実から逃避して生きていくキャラクターの女性が勤務するのに格好の職場が図書館である、という設定なのである。

これまでに放送された図書館員がメインキャラクターのドラマと同様に、「偽装結婚」のパートナーとなる「陽村超治」やその母親、「嘉門ヒロ」のいとこの男女、などがヒロインの勤務する図書館にやってきて、私的な会話をかわしているシーンが含まれている。図書館以外の職場で、勤務時間中に、友人や知人が訪れてきて、それらの人物と長時間にわたって会話するシーンが頻繁に出てくるケースを想定することは難しいのではないかと。図書館は、誰もが訪れることが可能な、ハードルの低さがあるが、そこで私的な会話が繰り返されていることは、利用者が少なく、ヒマな職場、という印象にもつながる。

注)

1)番組HPでの「第1回放送」のストーリー紹介部分の冒頭は、以下のようになっている。

「くだらない世間に背を向け、本だけをこよなく愛する図書館司書・嘉門ヒロ(天海祐希)。彼女は幼い頃から、美しい上に何をやらせても完璧にこなす才能を持っているゆえに人に妬まれ、疎んじられてきたことで人間嫌いになってしまった。そして今は、いつも穏やかな笑みを浮かべながら、心の中で周囲の人に悪態をつく毎日。すでに両親も亡くして

いるヒロは、古いアパートの一室で大量の本に囲まれて孤独な生活を送っていた」

「ストーリー」『偽装の夫婦』日本テレビ

(<http://www.ntv.co.jp/fake/story/index.html>)

4. 『偽装の夫婦』での図書館職員と利用者とのコミュニケーション

このドラマの中では、図書館のカウンタで職員に質問したり、何らかの対応を依頼している女性利用者との対話が、ほぼ毎回でてくる。1)

第1回放送では、カウンタで女性利用者が女性図書館員に「主人公が『わたしはタラを愛してる』とかいう本。何とかって人が主人公やったのよ」と質問している。それをみながら作業中の「嘉門ヒロ」(以下、本節では、ヒロ、と表示)のモノログ「そんなのもわからね〜のかよ。司書のくせに」が、字幕で表示され、ヒロは、カウンタ後方のブックトラックに、その本を表紙を見せるようにおく。女性図書館員は「著者の名前とかわかりませんか」とたずねるが、女性利用者はブックトラックの本をみつけて、「あ〜、それよそれ。Gone with the Wind 『風と共に去りぬ』』」といって、女性図書館員は「あー、そうじゃないかと思ってたんですよ」といっている。「レファレンスサービス」というには、簡単な質問だが、そうしたことに十分な対応ができない職員も存在している状況が、ヒロと対比的に描かれている。

第2回放送では、「ねえ〜、3年前から今日までの新聞が見たいんで持ってきてくれない」と女性利用者がいってくる。ヒロはカウンタに座っていて、「3年分になりますと、重さが60キロぐらい…」といいかけるが、女性利用者は「なるべく早く、お願いね」と、いすから立ち上がり、カウンタ前から立ち去ってしまう。ヒロは「わかりました」といっているが、そのあとはどうなったのかは、描かれていない。この対応では、どの新聞かも特定されていないし、そもそも「新聞」を「原紙」のかたちで、保存している図書館は少ないと思われる。縮刷版やマイクロフィルムで提供するケースもあるし、近年は、新聞社の有料データベースサービスを契約している図書館もあるが、そうしたことは想定されていない。

これ以降の回では、回答を求めて質問するというより、職員にとって対応に苦慮する「問題利用者」としてのふるまいといえる発言や行動をしている。

第3回放送では、女性利用者が、図書館カウンタに、返却する『三国志』ほか数冊の本の山ふたつをつみあげる。本文ページに×印がつけられているのを発見したヒロは「あの、これは」とたずねる。「今、このシリーズ読んでるんだけど、何巻読んだかわかんなくなっちゃうからさ」「申し訳ありませんが、他の方も読みますので」と注意すると、女性利用者は「別にいいじゃない。あ、消さないで、わかんなくなっちゃうから」といっている。

第4回放送では、ヒロが、ブックトラックに本をのせて、押しながら館内を歩いていると、女性利用者が「ねえ、悪いけど、これ預かっててくれない。食事してくるから」といって、手提げ袋に入った荷物をヒロに押しつけようとする。「そういうことは規則でできないことに。すみませんが」といっても、女性利用者は、ヒロの手に、無理やり手提げ袋をかけて「けちくさいこと、いわないでよ。いいでしょ。すぐ帰ってくるから。たのんだわ

よ」といって、どこかへ行ってしまふ。ヒロのモノログ「どいつもこいつも面倒なこと押しつけやがって」が、字幕で表示される。

第5回放送では、ヒロが、カウンタ内でPC作業をしていると、女性利用者が、机の前のいすに座って「ねえ、ほ、ではじまる4文字のことばで、あてもなくさまようことってなにかしら」といつてくる。ここだけとりだすと、レファレンス質問のようだが、実際には、女性利用者は、新聞のクロスワードを考えている。ヒロが「ほうこう（彷徨）、じゃないですか」といつのをきいた、女性利用者は「そっか、そっか、ほうこう、ね」といつながら、新聞に、直接、鉛筆で書き込んでいく。「申し訳ありませんが、他の人も読まれるので、そういうことは」といつながら、ヒロは、カウンタから身を乗り出して注意する。

第6回放送では、ヒロが、図書館カウンタで作業をしていると、女性利用者が「返却ね」と、本一冊をカウンタにおく。本のページがふくらんでいるのを見たヒロは、「あの、これは」とたずねると、「あ、この前の雨でぬれちゃって」といつ、「申し訳ありませんが、本は大切に扱っていただけると」やんわり注意すると、女性利用者「別にいいじゃない。どうせあたしたちの税金なんだから。じゃね」とどこかへ行ってしまふ。

第7回放送では、女性利用者が図書館長に向かって「何よ、あたしに、もう、図書館に来るなっていうの」といつ、館長「いや、わたしはただ、あなたが職員の支障になるようなことをされるから」といつが、女性利用者は「あんたたちが、まじめに働かないからでしょ。この税金どろぼうが」とうそぶく。

利用者と職員のコミュニケーションによる、資料・情報提供サービスは、現代の図書館サービスの中でも重視されているが、このドラマの中では、実質的には有用な情報提供が行われているという印象のものではなく、その実態について、矮小化されたイメージが、伝えられることになりかねない。

本の配架場所を聞かれてこたえる場面は各回にあるが、ほかに、図書館を訪ねてきた知人に、おすすめの本を紹介しているシーンがある。ヒロが「いろいろとえらい人の伝記を読んだ方が、よっぽどためになると思います」といつ、「何を読んだらいいか」「でしたら、おひまな時、図書館にいらしてください。おすすめの本を選んでおきますので」といつやりとりがあり、後にその知人が来館した際「ヒロさんがすすめてくれた本 すっごいおもしろくて、読書にはまりそうで」と『坂本龍馬』の本を取出し『坂本龍馬』の伝記よんでるんですけど」(第4回放送)といつている。さらに次回では、「おすすめしてもらった本、どれも面白くて、あつという間に読んじやいました。また何かいいのがあつたら、教えてください」(第5回放送)といつている。終盤の回では、図書館長がおすすめの本10冊を選定し、表紙を見せて展示するコーナーを設置しているシーン(第9回放送)もある。

2)

こうした放送内容からは、確かに、「本が好き」「本についてよく知っている」人が図書館に勤めている、という印象は伝わってくるが、『これからの図書館像』などで述べられている、情報サービスの重視や、課題解決支援といった方向性はあまり感じられない。3)

また、ストーリー展開の関係もあり、利用者として子どもが登場する場面が多くある。

ヒロが図書館内で、読み聞かせをするシーンでは、『100万回生きたネコ』（第1回放送）4）、『てぶくろをかいに』（第7回放送）5）、などが取り上げられている。全体に、利用者が映るシーンは多くないので、子どもの利用が図書館利用の相当の部分を占めているという印象が残る。

ヒロのモノローグで、「そうだ。わたしには本がある」「本さえあれば何もいらぬ」（第1回放送）、「やっぱり、本が一番だ」（第8回放送）、とあるように、図書館・図書館職員と本の結びつきが強く意識されている。ヒロが住んでいる部屋に大量の本があり、その重さで床が抜けてしまう（第1回放送）ところからストーリーが展開することは、本とのつながりの強さが前面にでていることを象徴しているといえよう。

図書館職員としてのヒロの存在感について、他の女性職員が「館長だって、このまま陽村さんがやめたら、どうしよう。この図書館ももうおしまいですよ。なんて、一日オロオロしてたんですよ」といい、図書館長は「私なんかいてもいなくてもいっしょですけど、陽村さんは図書館に絶対必要ですから」といっている。ヒロは「大切なのは、ここにいたいと思うか思わないかじゃないでしょうか。少なくとも私はここにいたいです。本が好きだから。だれでも自由に來ることができて」「好きな本を読むだけで、時間や空間を超え、いろいろな世界にふれることができる、素晴らしい場所だから」（第8回放送）といっている。本や図書館のすばらしさについて、語っている場面だが、具体的にどのような部分でヒロが評価され、図書館にとって必要とされているのかはわかりにくい。

注

1) 第8回放送で、この女性利用者は、ヒロの叔母に頼まれた家政婦で、わざと困らせるような質問をしていたことが明かされる。第9回放送では、この女性が、また図書館にやってきて「あ、あの、これからも来ていいでしょうか。本を読むのが、やみつきになってしまつて」といっている。

2) 画面に映っている本で、実際に存在が確認できるのは、以下のもの。

ジュディ・バレット文、ロン・バレット画、ふしみみさを訳『マクドナルドさんのやさしいアパート』朔北社、2009

吉田修一『路（ルウ）』文藝春秋、2012

江波戸哲夫『定年待合室』潮出版社、2012

リー・クワン・ユー『リーダーシップとは何か』潮出版社、2014

レベッカ・ドートゥルメール作・絵、うちだややこ訳『恋するひと』朔北社、2005

3) 『これからの図書館像』

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001/002.htm)

4) 佐野洋子 作・絵『100万回生きたねこ』講談社、1977

5) このストーリーは、複数の出版社から刊行されているが、画面に映るのは下記のもの。

新美楠吉・作 柿本幸造・絵『てぶくろをかいに』ひさかたチャイルド、2006

5. おわりに

現代のメディア界で注目を集めているジャーナリストひとりである 1)、池上彰は、2015 年に刊行された「子どもの貧困」問題を扱った著書の「指定管理者制度」について言及している部分で、「指定管理者制度というのは、言ってみれば『官立民営』みたいなものですよ、最近では図書館・公民館はたいてい指定管理になっている」「図書館に関しては、むしろサービスがよくなったと言われてますよね(笑)」(pp.77-78)と述べている。2)この発言の妥当性はさておき、図書館が指定管理によってサービスがよくなった、との評価がある程度広まっていることを示しているといえよう。

一方、かつて図書館に勤務した経験のある、与那原恵は、『文學界』の「特集 『図書館』に異議あり！」の中で、「現場ルポ『民営化』の危険な畏」とのタイトルで、武雄市図書館が批判的な観点から紹介している。3)

2016 年に入ってから、『朝日新聞』4)、NHK ニュース『おはよう日本』5)などで、図書館のあり方について、さまざまな立場からの見解が報じられた。

メディアによる報道の中では、図書館の運営面やサービス内容について、変化が起きていることが取り上げられており、その方向性についても、多様な見方が紹介されている。一方で、フィクションの中の図書館のイメージについて、テレビドラマ『偽装の夫婦』では、あくまで紙媒体が主体で、本がある場所・本の貸出利用が中心・子どもの利用が多いなどの印象が残るものであった。こうした図書館なら、図書館職員に求められているものも、従来と大きな違いはないだろう。しかし、メディアの変化や運営形態の多様化の中で、フィクションの中の図書館も変化していかざるを得ないのではないか。

ある程度、図書館に取材したことをもとに発表された、コミック『夜明けの図書館』6)では、図書館のレファレンスサービスが描かれており、コミック『図書館の主』7)では、書店と図書館との関係について、とりあげられている。今後のフィクションの中で、図書館資料やサービスのあり方、図書館職員の役割や専門性などは、どのような描かれ方になっていくのか。たとえば、医療関係のドラマでは、リアリティ確保のために、きめこまかな配慮がなされていると、報じられている。8)図書館についてもそうした対応が考えられるようになるのか、今後の動向を注視していきたい。

注

1)たとえば、「選挙特番」についてふれた下記の記事では、「番組平均視聴率 10.1%」「各党の幹部と生中継では鋭い質問を次々と浴びせた」と、記されている。

「池上彰氏のテレ東『選挙特番』が今回も高視聴率」

(<http://www.oricon.co.jp/news/2045937/full/>)

2)池上彰『日本の大課題 子ども貧困 社会的養護の現場から考える』筑摩書房(ちくま新書)、2015.3

池上彰は『日経ビジネスオンライン』に発表された「池上彰の『学問のススメ』(2015年5月18日)で、「池上彰の『図書館のススメ!』フレッシュャーズよ、図書館を使おう」というタイトルで、「池上彰さんが教鞭をとる東京工業大学の岡山キャンパス」「付属図書館大岡山本館」館長の高橋栄一教授と「21世紀の大学と図書館のあり方」について対談

を行っている。

(<http://business.nikkeibp.co.jp/article/manage/20150409/279761/>)

3) 「特集『図書館』に異議あり」『文學界』2015.5、pp.144-145

与那原恵 「現場ルポ『民営化』の危険な罫」『文學界』2015.5、pp.146-161

「私は、物書きになる以前、六年ほど都内の図書館で働いていたことがある」(p.146)と記載されている。

上の記事以外に、2015年2月2日に行われたシンポジウムでの各発言者の発言内容が「再構成の上」まとめられている。

「シンポジウム採録 公共図書館はほんとうに本の敵？」『文學界』2015.5、pp.162-176

4) 「耕論 図書館の原点」『朝日新聞』2016.1.27、p.15

永利和則 小都市立図書館(福岡県)館長 「公の使命ビジネスが浸食」

鎌倉幸子 図書館コンサルタント 「土地の記憶伝える『脳』に」

磯崎憲一郎 小説家 東京工業大学大学院教授 「『部教信仰』に陥っていないか」

5) 2016年2月1日には、NHK ニュース『おはよう日本』で、「どうあるべき? 公立図書館」が放送された。

(<http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2016/02/0201.html>)

放送の内容は、小牧市での図書館に関する住民投票、公共図書館数の推移、民間会社に運営を委託した事例として海老名市中央図書館の紹介と利用者の意見、海老名市教育課職員・運営会社責任者のコメント、「図書館作り 住民の力で」という北海道幕別町での取り組み、糸賀慶応大学教授のコメント、など。

6) 埜納タオ『夜明けの図書館 1』双葉社、2011.10

埜納タオ『夜明けの図書館 2』双葉社、2013.5

埜納タオ『夜明けの図書館 3』双葉社、2014.8

制作のプロセスについては、下記のインタビュー・講演で語られている。

『夜明けの図書館』の著者、埜納タオ先生に聞く(特集 描かれた図書館: マンガ・児童書編)『みんなの図書館』no.445、2014.5、pp.4-18

「基調講演 『夜明けの図書館』とレファ協 漫画家・イラストレーター 埜納タオ氏」(第12回レファレンス協同データベース事業フォーラム レファ協の10年: これまでとこれから 2016年2月18日)

7) 篠原ウミハル「第11話 書店と図書館」『図書館の主 2』芳文社、2012.1、pp.25-48

巻末には、「取材協力」として「千代田区立千代田図書館」「国立国会図書館国際子ども図書館」があげられている。

8) 『偽装の夫婦』と同じ時期に、TBS 系列で放送されていた、医療ドラマ『コウノドリ』についてふれた記事では、「リアルな描写の裏には」「専門家たちの手厚いサポートがあった」「出演者がそれぞれ自身が演じる役柄の専門家に不自然な点はないか、逐一確認していた」などの記述がみられた。

「医療スタッフが綿密指導 『コウノドリ』のリアリティ支える舞台裏」『スポニチ

Sponichi Annex』 2015.12.18

(<http://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2015/12/18/kiji/K20151218011705080.html>)

(本文中で参照した web ページは、2016 年 2 月の時点で公開されていたものです)